

春雷

春雷。都心で雷が降る』、去年の四月一日、寒冷前線の通過による雷雨が満開直前の桜の花びらを激しく打ち、一陣の突風が花散らしの嵐となつた。『昨年も 紫種梅雨を吹き払う春雷。都心に二重の虹』と、春雷に急襲された。

この季節、夕暮れ時や明け方頃になることがある。春雷が発生するのは地面近くは日一日勢力を増す春の季節の暖かい空気が流れ込み、冬の名残りの上空の寒気との間で大気が不安定となる。ダルマさんが逆立ちしているようなもので、元に戻ろうとして雷雲ができる。冬に押し戻そとする寒波の先兵と、春の暖気との境界の寒冷前線付近で激しい衝突が起きて、春雷の轟くこととなる。

春雷に続く四季折々の雷も独特な趣がある。夏の雷はタ立で象徴されるように、高さ方向への入道雲の爆発という視覚的な大きさと激しさがあり、発生回数も他の季節に比べ格段に多い。

秋の雷は春雷と逆に名残りの暑さの上空

に、晚秋や初冬の寒波がやってきた時に雷となり、冬の先触れとしての物悲しさが漂う。

日本海側の冬の雷は地元では雪起し、『発雷と呼ばれ、ほかの季節に比べて小ぶりながらも、雪雲に抱かれて秘められた意外な顔と激しい一面を持つている。ス・ペ・ボルトと呼ばれる普通の雷より数倍も明るい雷があり、ほぼ同時に何個所も落雷する優柔不断型の離れ業も持つていて。

夏の雷とは違つて、地面と上空の雷雲との間で放電の電荷が正と負が逆となりで、落雷ではなく空に向かつて雷が昇ることもある。という一味違つた冬の雷の姿を見せてくれよう。

時がめぐり、再び春雷が轟きとともに登場する。春雷のみが俳句の季語として一人席を占め、親しみ込めて歌われているのも、移ろう季節に春の風物詩として強く印象づけられているからだろう。